

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00752

研究課題名（和文）海外の初・中等教育の日本語教育におけるバイリンガル/イマージョン教育に関する研究

研究課題名（英文）A study on bilingual/immersion programs in Japanese language education at primary and secondary schools outside Japan.

研究代表者

門脇 薫（Kadowaki, Kaoru）

摂南大学・国際学部・教授

研究者番号：40346581

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語と日本語のバイリンガルプログラムを持つ、オーストラリアの小学校（以下「日英バイリンガル校」）における日本語の教授法、及び日本語能力の評価方法に関する研究調査を行った。日英バイリンガル校2校の日本語教師を対象としたインタビュー調査を実施し、その結果から得られた知見を両校の日本語教師間で共有し、よりよい教授法について検討することができた。また、両校の6年生の日本語能力の測定を実施し、児童の日本語の習得状況が明らかになった。それにより日本語教師に教育実践に対する気づきをもたらし、日英バイリンガルプログラム及び日本語の教授法に関する改善につながった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、日英バイリンガル校における日本語教育の実状を明らかにすることができた。また、日英バイリンガル校の児童を対象に、標準化された日本語能力の測定を行ったことは非常に画期的であった。日本国内の児童生徒を対象にした第2言語としての日本語（JSL）教育で行われている評価ツールを利用した本研究の試みは、海外の児童生徒を対象にした日本語（外国語としての日本語：JFL、継承語としての日本語：JHL）教育における日本語能力の評価方法を示すことができた。本研究の成果は、海外の児童生徒対象の日本語（JFL・JHL）教育、日本の日本語（JSL）教育、バイリンガル教育の分野の研究の発展に貢献しうる。

研究成果の概要（英文）：This study investigated methods of teaching Japanese and assessing Japanese language proficiency in Australian primary schools with Japanese-English bilingual programs. Interviews were conducted with Japanese language teachers in two schools. The findings were shared between Japanese language teachers in both schools to discuss better teaching methods. In addition, the Japanese language skills of the Year six students in both schools were measured, and the students' acquisition of Japanese language skills was clarified. This provided Japanese language teachers with insights into their teaching practices and led to improvements in the Japanese-English bilingual programs and Japanese language teaching methods.

研究分野：日本語教育

キーワード：バイリンガル オーストラリア 日本語能力 評価 日本語教師 JHL/JFL/JSL 海外の日本語教育 日本語教授法

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

多言語・多文化社会のオーストラリアでは、初・中等教育における外国語教育が盛んであり、特に、小学校(初等教育)での日本語学習者数が最も多い(国際交流基金 2023)。小学校の中には英語と日本語によるバイリンガルプログラムを持つ公立の小学校がある。このような日英バイリンガル校では、教科の内容を部分的に日本語教師が日本語で教えている。

しかし、効果的な教材や教室活動など具体的な日本語の教授法が確立されているわけではなく、現場の日本語教師は試行錯誤しながら日本語の指導にあたっている。海外の日英バイリンガルプログラムにおける日本語教育に関する実践報告や研究は非常に限られており、その実態は明らかになっていない。

また、日英バイリンガル校では、オーストラリアのカリキュラムに沿った教科内容について児童の理解度を英語と日本語で評価しているが、児童の日本語の側面を客観的に測定しているわけではない。

2. 研究の目的

本研究では次の2点について調査分析を行う。

(1) オーストラリアの日英バイリンガル校における日本語教育

日英バイリンガル校では、どのように日本語教育が行われているか、どのような点が困難であるか等、現状と問題点を明らかにする。

(2) 日英バイリンガル校の児童の日本語能力の測定方法

海外の日英バイリンガル校において、外国語としての日本語(JFL)または継承語としての日本語(JHL)として学習する児童の日本語能力の測定を試みる。

これらの調査によって、よりよい日英バイリンガルプログラムの教育実践について考察する。

3. 研究の方法

異なる州の日英バイリンガル校2校において次の調査を行った。

(1)の日英バイリンガル校の日本語教育の実状を調査するために、両校の日本語教師19名(全員が日本語母語話者)に、一人30-40分の半構造化インタビュー調査を2021年度に個別にオンラインで実施した。音声データは文字化し質的に分析した。また、海外渡航が可能になった2022年には、現地で日本語授業の見学も行った。

(2)の児童の日本語能力の測定は、現地の日本語教師及び研究代表者が学校訪問をして2021、2022年度に実施した。最終学年である6年生を対象に、日本国内の日本語母語話者児童生徒を対象にした語彙テスト及び「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント(以下「DLA」)」「(文部科学省2014)を試みた。DLAでは、「書く」「話す」「読む」を行った。

4. 研究成果

日英バイリンガル校の日本語教育の現状と課題

2校の日本語教師を対象にしたインタビューでは、日本語教師自身の属性及びバックグラウンド・プログラムの内容・授業で工夫している点・困難な点/問題点等について回答を得た。特に日英バイリンガル校における課題を明らかにするため困難な点について分析した結果について述べる。回答内容は「プログラム」「組織プログラムの運営」「周囲の理解と協力」「情報共有」の4つのカテゴリーに分けられた。レベル差のある児童に日本語のみを使用して直接法で教えること、オーストラリアのカリキュラムに合わせて教えるべき日本語を選定し教材を独自に作成すること等、日英バイリンガルプログラムの特殊性によって生じる困難な点が浮き彫りになった。

今回の調査結果は、両校の日本語教師間で共有され、具体的な教授法について情報共有を行うことができた。本研究のインタビュー調査によって、日英バイリンガル校の現状と課題について明らかになった。

日英バイリンガル校の児童の日本語能力の測定

日英バイリンガル校において、日本国内で実施されているDLAの実践を試みた。オーストラリアの日英バイリンガル校での日本語教育と、日本国内の第2言語としての日本語(JSL)教育は、日本語で科目を教えるという点で共通点があるためDLAを利用することが可能だと考えた。これまで日英バイリンガル校では、その州のカリキュラムの内容を児童がどのくらい理解しているか、児童の日本語のレベルは学校内でどの位置にあるか等を評価していた。しかし、本研究でDLAの「話す」「読む」「書く」を6年生に実施した結果、児童の日本語能力を客観的に示せることがわかった。特に、これまでオーストラリアでは、小学生を対象にした日本語の「話す」能力を測定するツールがなかったため、本研究におけるこのような試みは非常に画期的であった。

日本語能力の測定結果による日本語教師の気づき

今回日本語能力の測定にDLAの「話す」を実施したことにより、児童の話す能力が明らかになった。A校では、日本語教師の期待する日本語能力より低い結果となった。このDLAの結果をふまえA校の日本語教師は、これまでの授業を見直し児童がより多くの日本語を話すことができる活動を取り入れ、授業実践の改善を行った。

このように日本語能力の測定により児童の日本語能力が客観的に示されたことで、日本語教師に自分自身の授業について振り返り、気づきが生じていた。

児童の2言語作文の分析

6年生の児童を対象に、DLAの「書く」にあるテーマで、日本語と英語で同じテーマで別日に作文を書いてもらった。書かれた作文を分析すると、A校の児童の英語作文は、どの児童も「学校紹介」のテーマに見合った内容で多様な文章を自由に産出した。一方で、日本語作文は、英語作文と同様の構成をとりつつも、内容や量は個人差が大きかった。しかし、既習の語彙制限を越えるのにトランスランゲージング(García & Li, 2014)がうまく使われている事例が複数見られた。これらの結果より、児童たちが日英の萌芽的バイリンガル(emergent bilingual, (García & Li, 2014)として育ちつつある様子が確認された。また、A校とB校の児童の2言語作文の評価を比較すると違いが見られ、日本語教師の指導によって異なる結果になることが示唆された。

以上のように本研究では、海外の日英バイリンガル校における日本語教育の実状を明らかにし、海外で日本語を学習する児童の日本語能力の評価方法の一例を示すことができた。海外の日本語教育においてこのような研究はこれまで行われていなかったため、本研究の成果は海外の児童生徒を対象にした日本語(JFL・JHL)教育、日本国内の児童生徒を対象にした日本語(JSL)教育、バイリンガル教育の研究分野の更なる発展に貢献できると考えられる。

引用文献

国際交流基金(2023)『海外の日本語教育の現状 - 2021年度海外日本語教育機関調査より -』
国際交流基金.

文部科学省(2014)『外国人児童のためのJSL対話型アセスメントDLA』文部科学省.

García, O. & Li, W. (2014). Translanguaging: Implications for language, bilingualism and education. Palgrave Pivot.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 門脇 薫・橋本 佳代子	4. 巻 18
2. 論文標題 オーストラリア・クイーンズランド州の中等教育機関 及び州政府の文書に見られる日本語母語話者教師の捉え方 「native」という語彙の使用を通して見る言語教育政策	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学日本語教員養成課程研究協議会論集	6. 最初と最後の頁 25-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 門脇 薫	4. 巻 27
2. 論文標題 オーストラリアの公立小学校における日英バイリンガルプログラム - 日本語教師対象のインタビュー調査より	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ヨーロッパ日本語教育	6. 最初と最後の頁 395-406
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kaoru Kadowaki, Takako Morita	4. 巻 5
2. 論文標題 Trial Practices of Dialogic Language Assessment in Bilingual Schools in Australia	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 National Symposium on Japanese Language Education Proceedings	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 櫻井千穂	4. 巻 16
2. 論文標題 外国につながる児童生徒への教育 - 課題とその解決に向けた提言	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 14-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 門脇薫、櫻井千穂
2. 発表標題 オーストラリアの公立小学校における日英バイリンガルプログラム - 言語能力アセスメントの分析より
3. 学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kaoru Kadowaki, Takako Morita
2. 発表標題 Trial practices of "Dialogic Language Assessment (DLA) for Japanese as a Second Language" at Japanese-English Bilingual Primary Schools
3. 学会等名 National Symposium on Japanese Language Education
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 門脇 薫
2. 発表標題 中等教育における日本語アシスタントに関する一考察 - オーストラリアの事例を中心に
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 門脇薫
2. 発表標題 オーストラリアの公立小学校における日英バイリンガルプログラム - 日本語教師対象のインタビュー調査より
3. 学会等名 17th EAJS International Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 門脇 薫、櫻井千穂
2. 発表標題 オーストラリアの日英バイリンガル小学校における日本語教育 Y校とZ校の事例より
3. 学会等名 Biennial Conference of the Japanese Studies Association of Australia 2023/ International Conference of the Network for Translingual Japanese (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Houghton, Stephanie Ann, Bouchard, Jeremie (Eds.), (Chap 8 Kaoru Kadowaki)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 287
3. 書名 Native-Speakerism Its Resilience and Undoing (Chap 8 “Native” Japanese Speaker Teachers in Japanese Language Education at Primary and Secondary Schools in Australia)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	櫻井 千穂 (Sakurai Chiho) (40723250)	大阪大学・大学院人文学研究科(外国学専攻、日本学専攻)・准教授 (14401)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	森田 貴子 (Morita Takako)	コールフールド小学校・教諭	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------